

飼料をめぐる情勢について

平成17年5月

農林水産省 生産局

1、家畜飼料の種類

濃厚飼料

○ 穀類（とうもろこし、こうりゃん等）、大豆粕、糠（フスマ、米ヌカ等）等がある。
粗飼料に比べてTDN（可消化養分総量）、CP（粗たん白含有量）が高い飼料。エネルギー、たん白質の供給源として重要な飼料。



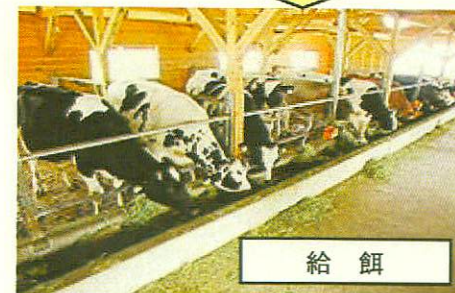
濃厚飼料（配合飼料）

粗飼料

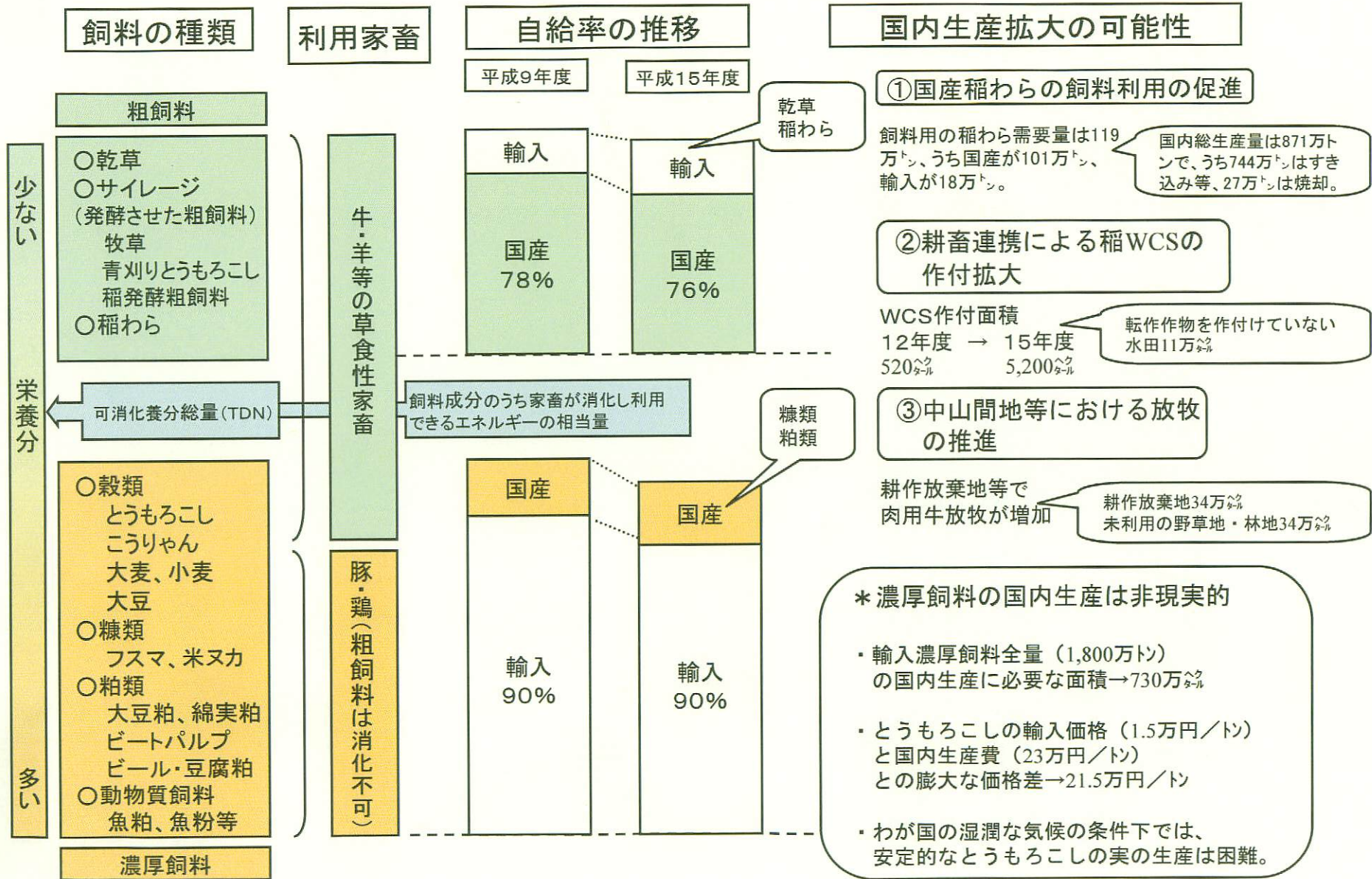
サイレージ調製の様子

（日本は湿潤温暖なため、乾草の調製は難しい。）

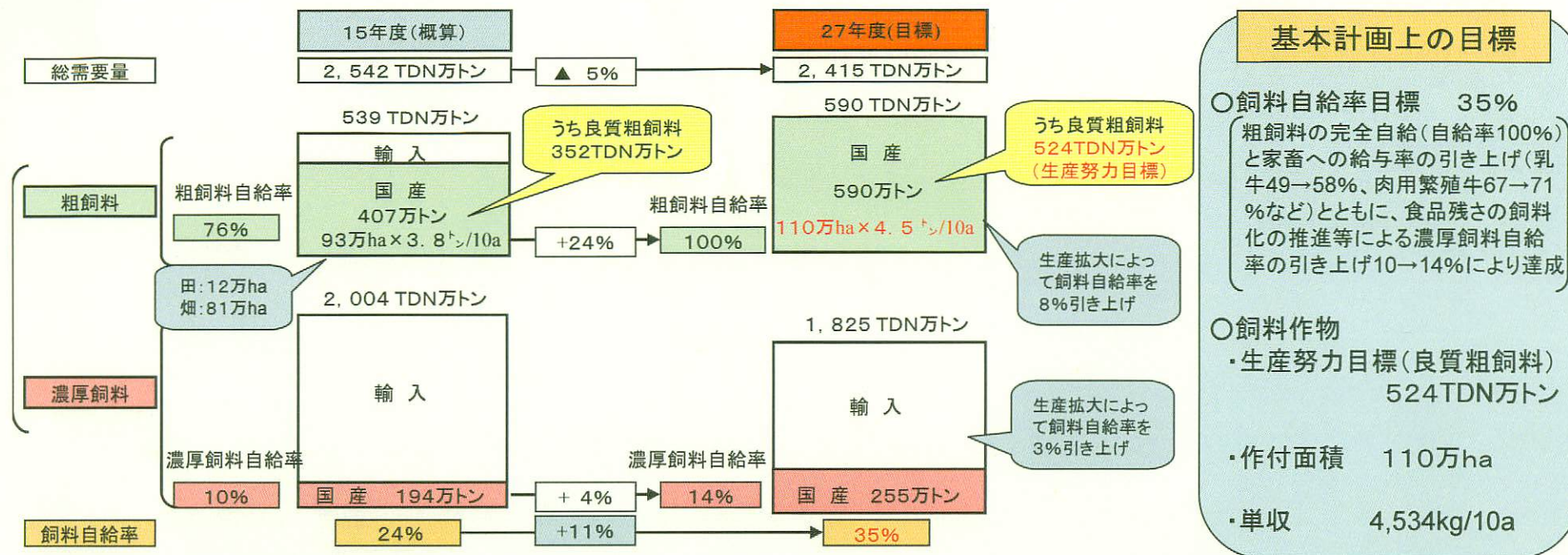
○ 粗飼料は茎葉を乾草（乾燥）、サイレージ（発酵）にして貯蔵できる。
濃厚飼料に比べると粗繊維質が高く、TDN、CP含有量が低い飼料。草食動物である牛にとっては栄養源となるばかりでなく消化機能を安定させるなど、生理的にも必須の飼料。



2、家畜の飼料について



3、 飼料自給率及び生産努力目標の考え方



飼料作物の生産拡大

○ 耕畜連携による稲発酵粗飼料等の生産拡大

転作作物を作付けていない水田が11万ha、耕作放棄地が34万haなどあり、これら国土を有効活用することにより、27年度の作付面積は、15年度の93万haに比べ17万ha増の110万haに拡大すると見込む。

○ 国産稲わらの飼料利用の拡大

稲わらについては、15年度(15年出来秋)で需要量119万トン(乾物重量)の15%に相当する18万トンが輸入されており、27年度までに全量が国産稲わらに置き換わると見込む。

○ 耕作放棄地等における放牧の推進

放牧は、生産コストの低減はもとより、耕作放棄地の解消や棚田保全、資源循環型畜産の確立の観点からも重要。

濃厚飼料の自給率の向上

○ 食品残さの飼料化を推進

食品廃棄物の飼料化割合の向上(17→53%)や配合飼料工場でのロス(減耗)の低減(2.6→1.3%)などを見込む。

4、食品残さの発生と再生利用(飼料化)について

